第４学年Ａ組　　国語科　　授業者　川端　大奨

単元名「世界にほこる“和”歌山　～和紙新聞から和歌山新聞～」

教材名「世界にほこる和紙」

１．目的・目標・評価規準

本単元では，目的を意識して，中心となる語や文を見つけて要約する力を身に付けることが大切になる。そこで，文章全体の内容を正確に把握した上で，元の文章の構成や表現をそのまま生かしたり自分の言葉を用いたりして，文章の内容を短くまとめることができるようになることを目指す。

・比較や分類の仕方，必要な語句などの書き留め方，引用の仕方や出典の示し方等を理解している。（知識・技能（２）イ）
・目的を意識して，中心となる語や文を見つけて要約している。（思考・判断・表現Ｃ（１）ウ）
・粘り強く，必要な語句の書き留め方などを理解し，自らの学習を調整し，中心となる語や文を見つけて要約しようとしている。（主体的に学習に取り組む態度）

２．教科の本質と教材について

国語科の本質は，国語を正確に理解し，それらを使い，どんな場面でも適切に表現することができるようになることである。本単元では，文章を正確に理解することで文章の中から適切な語句や文を選び抜き，その選び抜いた語句や文をもとに筆者の思いや和紙の良さが伝わる文章に短くまとめることを目指していく。

本教材は，筆者の考えがはじめと終わりに書かれている双括型の文章である。そのため筆者の考えをとらえやすい。また，文章の構成や書かれている内容も簡単なものとなっており子供たちもおおむね理解できるものとなっている。そして伝統工芸である和紙の良さや筆者の考える魅力が中に書かれており，問いに対する形で書かれているため，とらえやすいように書かれている。

４Ａでは，取り組んでいるCHANGE（総合的な学習の時間）で和歌山の魅力を発信するという学習を行っている。そのなかで子供たちは，伝統工芸も和歌山も魅力の一つだと考えている。そして，和歌山の魅力を発信するためには，口頭や動画だと伝える側が技術を要する上に調べたことや聞いたことをすべて伝えることは難しく，紙媒体の形にすることが一番伝えやすいと話し合いで共有した。そこで発信するための手立てとして文字にして発信することが自分たちにできることで一番有効だと考えている。そのため，今回の学習で，学んだことをCHANGEでも活かしていくことができる。

３．子供の実態（抽出児）と単元末に期待する本質を味わった子供の姿

文章全体の内容を正確に把握した上で，元の文章の構成や表現をそのまま生かしたり自分の言葉を用いたりして，文章の内容を短くまとめることができる姿を目指したい。

Ａ児・・・文章を書いたり，読み取ったことをまとめたりすることが苦手である。しかし振り返りや日々の成長ノート（一日の振り返りのノート）は，頑張って書こうとする姿が見られ，苦手を克服しようとする姿が見られる。そんな彼が楽しんで学習課題に向かい，学習課題を達成し，自分でも書くことができる実感をもち，文章を書いたり，読み取ったことをまとめたりすることへの抵抗を少しでも減らしてほしい。

Ｂ児・・・学習の理解度も高い。しかし学習課題に興味がないと退屈してしまい，学習に積極的に取り組むことが難しいことがある。そんな彼が，友達と協力し合い友達の言葉や自分で考えた言葉をもとに積極的に要約し，友達と協働することで，学習課題への向かい方が変わることを実感してほしい。

４．本単元における教科の本質を味わうためのしかけ

<u>しかけ①：和紙新聞を作る</u>

本単元では，和紙新聞を作るという言語活動を設定した。和紙のことを記事にするためには，書かれていることを短くまとめ，わかりやすく伝えるために，文章の中から語や文を抜き出す必然性が生まれる。今回和紙新聞を作り，その中で身に付けた要約する力が，CHANGE（３次）での学習で活かされる。

子供たちは，和歌山の魅力を伝えるために新聞を作ることを目的にしている。それは，自分たちで調べたことや経験したことをもとに和歌山の魅力を発信し，いろんな人に改めて和歌山の良さを知ってもらうことに目指しているからである。新聞を作るうえで要約が必要になり，目的をもって文章の中から必要な語や文を抜き出し短くまとめることができるであろう。また抜き出すだけでなく，言葉を足したり，言い換えたりしながらより伝わるものにしようと

する姿を目指していきたい。

しかけ②：CHANGE と国語科をつなげる

４Ａでは，和歌山の魅力を発信するという取り組みを行っている。そのなかで，和歌山の魅力は特産品だけでなく，伝統工芸や場所，動物，歴史，乗り物，建物も魅力であると捉えており，和歌山の魅力を発信する際に本単元で学習した要約をする力を活かしていくことができる。またCHANGE の学習と国語科の学習をつなげて単元を組むことで，子供たちは，目的（和歌山の魅力を自分たちで発信するため）を常に意識し要約し，新聞の記事にしようと学習に取り組むであろう。

５．学習の流れ（全６時間　本時　５／６）

※CHANGE
・和歌山の魅力を伝えるためには，どのような媒体が適切か考える。
・和歌山の魅力を伝えるためにはどんな新聞にすればいいかを考える。

１次
第１時：伝統工芸の良さやそれに関わっている人の思いを新聞にしてわかりやすく伝えるという見通しをもち，学習計画を立てる。【知】
２次
第２時：本文の中から筆者の和紙に対する思いが書かれている文を抜き出し，記事にするためにはどんな文章にすればいいかを考える。【思】
第３時：本文の中から筆者の和紙に対する思いが書かれている文を抜き出し，記事にするためにはどんな文章にすればいいかを考える。【思】
第４時：本文の中から和紙の良さが書かれている文を抜き出し，記事にするためにはどんな文章にすればいいかを考える。【思】
第５時：本文の中から和紙の良さが書かれている文を抜き出し，記事にするためにはどんな文章にすればいいかを考える。（本時）【思】
第６時：和紙新聞を書き，記事の文章が他人に伝わるかを友達と交流して確かめる。【態】

※CHANGE（３次）
・和歌山の魅力新聞の記事を書くために，調べてきた文章の中から何が必要かを考え抜き出し要約する。
・和歌山の魅力新聞を書く。
・和歌山の魅力新聞の記事が他人に伝わる文章になっているかを交流して確かめる。
※完成した和歌山の魅力新聞は，学園祭に掲示していろんな学年や大人の人に見てもらう。

６．本時の目標（主たる指導目標）

目的を意識して，中心となる語や文を見つけて要約できる。【Ｃ（１）ウ】【思】

今回の単元では国語科として要約の力を身に付けてほしいと考えている。自分の知っていることや調べてわかったことなどを他者にわかりやすく伝えるためには，要約することが必要不可欠であることに気付き，書かれている文の中から伝えたい語や文を抜き出し，言葉を足したり言い換えたりする姿を目指したい。

本時では，和紙の良さについて，自分が，記事にしたいところを叙述から抜き出し言葉を足したり言い換えたりして短くまとめる活動を行う中で，自分でも多くの文章を要約できたと実感し，次の学習に活かそうとする姿を目指したい。

引き出したい子供の言葉

筆者の思いや和紙の良さが書かれている文章を抜き出せば，簡単にまとめられた。こうやって文や語を抜き出して言葉を足し足り言い換えたりすると意外とできると分かった。ほかの文章でもできるかどうか試してみたい。

７．リフレクション

７．１．本実践と生徒エージェンシーの発揮を可能にするための３つの要素とのつながり

本実践では，生徒エージェンシーの発揮を可能にするための３つの要素のうち①子供たち一人一人が情熱を燃やし，別々の学習経験や機会をつなげて考えるようになることに重点を置き，③しっかりとした基礎力をつけることも意識しながら単元を構想した。

まず、子供たちに，学習の目的意識を持たせる，工夫が必要だと考えた。それは，「説明文を読んで，ただ要約しましょう。」という学習課題にすると子供たちは，目的意識もなく知識技能の習得だけに終わってしまう可能性があるのではないかと考えた。そこで，CHANGE（総合的な学習の時間）と国語科の学習をつなげて，課題設定を行うことで，子供たちは，目的意識を持ちさらに意欲的に学習に取り組むと考えた。この国語科と CHANGE をつなげて，学習課題を設定することが，生徒エージェンシーの発揮を可能にするための要素①になる。

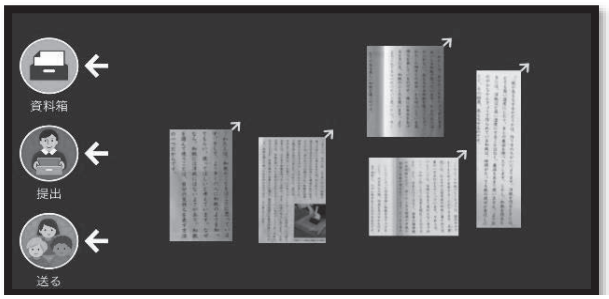
また，CHANGE と国語科の学習をつなげて単元構想することで国語科での学びを CHANGE の学びに活かすことができる可能性があることから CHANGE の学習を国語科の学習の前後に位置付けた。（単元構想シート５　学習の流れを参照）

７．２．抽出児の学びについて

ここからは本実践を経て抽出児であるＡ児とＢ児の学びと学習課題とのつながりについて述べていく。

【Ａ児】は，文章を書いたり，読み取ったことをまとめたりすることが苦手である。しかし振り返りや日々の成長ノート（一日の振り返りのノート）は，頑張って書こうとする姿が見られ，苦手を克服しようとする姿が見られた。しかし，文章をまとめたり，要約したりするという活動自体に嫌悪感をいただいていることは間違いなかった。

そこで「楽しんで学習課題に向かい，学習課題を達成し，自分でも書くことができる実感をもち，文章を書いたり，読み取ったことをまとめたりすることへの抵抗を少しでも減らしてほしい。」という願いをもって本実践を行った。Ａ児の振り返りでは，「文章をまとめることは苦手だったけど，タブレットを使ったり，友達に教えてもらったりしていると少しずつできた。がんばって魅力新聞を書けたらいいな。」と記述していた。また本時の中でタブレットに本文の切り抜きを写真にして子供たちに送るというしかけ（図１）を行った際に「はやく写真くれやんとまとめたいのに」といった発言をする姿も見られた。これは，自分たちで，探してきた根拠となる文章を使いたいから，写真を送ってほしいということを伝えたいのだと推測ができる。その後のＡ児は，単元終末に作成した和紙新聞を自分一人で完成させることができた。そして和歌山の魅力新聞を作成する際には，自ら進んで，記事を書くために友達と相談しながら，根拠となる文章を選んだり，短くまとめて書いたりする姿が見られた。



（図１）　子供のタブレットの画面　文章を選択している画面

【Ｂ児】は，学習の理解度も高い。しかし，学習課題に興味がないと退屈してしまい，学習に積極的に取り組むことが難しいことがあるということがある児童である。

その中で教師として，「そんな彼が，友達と協力し合い，友達の言葉や自分で考えた言葉を基に積極的に要約し，友達と協力することで，課題解決への向かい方が変わることを実感してほしい。」という願いを持って本実践に臨んだ。Ｂ児は，第５時（本時）で以下のように発言している。

教師：Ｂ児さん無理やって。助けてあげて。
Ｂ児：まとめるのが。どうしたらいいんやろか
Ｎ児：和紙の良さやから前のホワイトボードの囲っているところを書けばいい。

このように，要約することが，難しいと感じていたようだ。そこでＮ児が発言し，その後Ｂ児は活動に取り組むことになった。

この時の振り返りにB児は，「N児さんに教えてもらったり，アドバイスをもらったりしたことがうれしかった。教えてもらったことをほかの人にも教えてあげるとありがとうといってくれたからうれしかった。友達と協力しながらやると意外とできそう。」と記述していた。これはN児の発言がB児の困りごとを解消するきっかけになったと言える。

第 6 時ではB児は積極的に友達と関わりながら記事を完成させる様子が見られた。またN児に記事の内容を相談しに行く姿も見られた。

７．３．考察とまとめ

上記の子供の姿から考察を述べていく。A児の振り返りから，楽しんで学習課題に向かい，学習課題を達成し，自分でも書くことができる実感をもち，文章を書いたり，読み取ったことをまとめたりすることへの抵抗を少しでも減らすことに迫ることができたと言える。それは目的意識を持ち，要約するという学習課題に向かっていくことができた捉えている。このA児の姿は，生徒エージェンシーの発揮を可能にするための 3 つの要素のうち①子供たち一人一人が情熱を燃やし，別々の学習経験や機会をつなげて考えるようになることにつながっていると言えるであろう。子供たちが目的意識をもって学習に取り組むことは情熱を燃やし国語科の学びと CHANGE の学びをつなげて考えており，その先に達成すべき目標があるため今回のA児の姿につながったと言える。A児は，和歌山の魅力新聞を作成する際にも自ら進んで，記事を書くために友達と相談しながら，根拠となる文章を選んだり，短くまとめて書いたりする姿になっていることからも生徒エージェンシーの発揮につながる姿に近づいていると捉えた。

B児に振り返りから学習課題に向かう際に友達と協力していくことでいろんな考え方ができ，それらを使い学習課題の解決につながることを理解したと推測する。第 6 時以降もB児は，N児と関わりを持ちながら学習課題に向かう姿が見られた。また友達と関わりながら学習を進めることで要約するという学習課題に向かっていくことができた。しかし，今回N児の発言が元でB児は関わりを持ち，学習課題に向かっていったが，これは，偶発的なものであり単元構想の中では起こりえなかったのではないかと考える。生徒エージェンシーの発揮を可能にするために他者との関わりは大切ではあるが，自分一人でも学習課題に向かっていけるしかけがB児には必要だったのではないかといえる。

本実践のまとめとして，学習課題を設定するときに他教科とのつながりを意識し，そこに子供たちが目的意識を持ち向かっていける環境設定が大切だと分かった。子供たちは目的意識をはっきりとすることで，学習と学習もつながりを見つけ，自分事として物事を考えることができる。子供たちが，自分事として学習課題をと捉えたときに情熱を燃やし別々の学習経験や機会をつなげて考えるようになのだと本実践を通して見えてきた。

また国語科と CHANGE の学習をつなげて単元構想をした結果，CHANGE の学習でも子供たちの意識の変化を見ることができた。それは，和歌山の魅力新聞を作成するときに人任せでなく，全員が参加し，役割を決めながら，新聞づくりを行っていたことである。各グループ（４～５人）で新聞を作成する際に，作業の隙間を使い，誰かが仕事がない時間帯を作らずに新聞づくりを進めていた姿である。これは国語科で学習したことが直接働いているわけではないが，目的意識は共通のものであったため，子供たちは教科の垣根を越えて，一つの学習として捉えていたのではないかと考えれる。

今後も各教科の本質に迫りながらどういった場面で生徒エージェンシーの発揮につながる学びがあったのかを整理分析し，子供たちに汎用的な力を身に付けさせることができるのかを追求していきたい。